

坂本
遼
作品集

駒込書房

坂本 遼
||
作品集

駒込書房

坂本遼作品集 (全二卷)

一九八一年四月二五日印刷
一九八一年五月一五日發行

著者 坂本 遼
發行所 駒込書房
東京都北区中里二丁目二五―二
電話〇三―八二二―一五〇七
装幀者 村上善男
印刷 近代美術
製本 金秀社

© YÔ SAKAMOTO

坂本遼作品集 目次

小説集『百姓の話』（一九二七）

梯子	9
ミリカン家の下男と下女	9
猫	29
手紙	31
朝鮮人	33
芋	35
芋畠	37
肩掛	37
祝杯	40
接吻	43
芋畠の出来事	44
昼の宿	48

鴉追ひ男と冬眠蛙……………50

芋畠の鴉追ひ男……………52

南……………54

ジョゼフとりね子……………62

端書……………68

例言……………70

詩集『たんぼぼ』（一九二七）

序（草野心平）……………73

時雨

時雨……………77

たんぼぼ

春

春	83
日向	83
たんぼぼ	84
おかん腹おさえておくれ	85
春	85
食ふものがないので	86
●	86
燭	
だまつてゐる心と心	87
十月五日	88
お鶴の死と俺	89
やいたをたてる母子	90
町の女の人はおらの心をひく	92

厩

四月二十五日	93
春	93
おら切なかつた	95
恋人	96
持病	98
大正琴	
秋	100
二十二歳の秋	100
かいつぶり	100
時雨	102
からす	103
厩	105
厩	105

牛……………107

●……………108

鉾

鉾……………109

花びらが散りかかる……………109

桃の花……………110

悲劇……………111

跋（原理充雄）……………113

自序……………116

未刊詩篇Ⅰ 戦前（一九二五～一九三五）

妹よ……………121

夢を見る母子……………123

浅やんの心……………124

赤いだるまと青いひょうたん……………125

みみず……………127

山のイノックアーデン……………128

秋とおらの家の不運……………130

●……………130

二十四歳の冬……………131

断片詩……………132

おらと百五十八番とその妻と……………133

おかん……………135

百姓……………137

おかんの死……………138

今日義兄が監獄からもどつてくる……………142

食ふために……………144

たんぼぼ……………146

おみい……………153

ストライキ……………158

未刊詩篇Ⅱ 戦後 (一九四九～一九六九)

遺書 その一……………171

遺書 その二……………177

終戦日記……………180

白壁……………182

椿酒……………185

れんげ畑……………187

花と牛……………189

美しい人……………194

ガニヤ……………196

イキイキゴンボ……………198

麦……………200

訳詩(カミングス・詩二篇)……………204

木山捷平詩集『野』に寄せて……………206

詩を作る人……………208

自傳……………213

編註(解題・校異)……………218

坂本遠略年譜……………228

小説集

百姓の話

1927

全

ミリカン家の下男と下女

洋館の常として長い狭い階段は外側に付いてゐたから雪が階段の上にも降り込んでゐたのだらう、這入つて来た女の髪の上には、とても大きな雪片がふりかかつてゐた。頬の紅さは冷え少しく紫色に変つてゐて、心持ち下瞼の水平になつた月形の澄んだ眼を少し細くして笑ふと、齒が白かつた。

私は、女がミリカン家から盗つてきてくれたのであらうプルンの実を前において非常に心苦しい氣持になつてゐたが、女の晴やかな氣持に合せやうと思つて突然に云つた。

「あのね、僕困つてゐるんです」

「あら、どうして」

「半年も一緒にゐてまだお名前が判らないのです」

「あら、そんなことどうだつていいじゃありませんか」

「でも親切にしてくださいながら何かこたはりがあるやうで淋しいんです」

「さう。じゃ矢野花子と申します」

「ほおう。花子なんて素敵ですわね」

「そんなら花子さんと呼んで頂戴」

「でもそんなこと云へしません。ぢや最も親しいやうに、おばさんと云ひますよ」

「あら、そらひどいわ。私いくつに見えて」

「二十八ですかね」

「じやうれしいわ。あなたのお姉様に見へるでせう」

「僕こんなきぢやない顔してゐますから姉弟なんかに見へしません」

「……なんてね。」

それがいいわ、お姉様と云つて頂戴。ね。」

と、女がやつぎばやにさう云つたので二人はほんとにたはいのない笑をした。

「こんなにくつろいで今日はほんとにうれしいわ。ぢや姉弟だからこんなことをききますがね、りね

子と私はどのやうに見へて。ほんとうに云つて頂戴。」

「やつぱり親子ですもの……」

「親娘二人きりゐておかしいでしょ」

「いいね」

「二人きりであるなんてね。あなただつていいお年でこうしてゐらつしやるでせう。世間からこう取

り離されてゐますわね。みんな落ぶれ者ですわね。」

と云つて、高らかに笑つてゐたが、急に気まずくなつて二人とも黙つてしまつた。

女は北の小さい青い窓の所へ行つた。馬車の窓のやうな硝子は、久し振りにおこした炭火で白く曇つてゐた。女は軽やかに曇りを拭いてゐたが

「雪が止みましたね」

と云つて出て行つた。

尨大な西洋館とこの二階建の下女部屋との間は昼も薄暗がりなんだがその間を地面まで長くついてゐる狭い鉄階段をこつこつと降りてゆく女の足音を無意識に数へてゐた。

いつの間にか私は、三畳には少し大きすぎる潰れかかつた寝台に顔を埋めてゐた。そして又思ひ返したやうに仰向いて顔の上まで天井からぶらさげてゐる箱をついてみたりした。

私はミリカン家の下男をする傍ら、ある専門学校に通つてゐたが、その頃はよく休んだりしてゐたものだから女からも見下げられてゐるやうな気がしてゐて、最前「おちぶれ者」などと云はれたのが可成り悲しく身に沁みてきた。

併しこんな平凡なづるけた自分に色々親切をしてくれ始めた女に対して感謝する心持がどつかから湧いてくるやうでちつとして居れなかつた。

起き上ると机の上の孔雀の羽が長く壁まで影をひいてゐた。夜更けだから眠らうと思つて錠戸を閉

めに窓へ寄つた。また硝子は曇つてしまつてゐたので、最前女がしたと同じやうに指の尖で拭いた。

雪が風に舞つてゐた。そして白い腰巻が薄闇の中ではたはたと翻つてゐた。

私はいま心の底からこう云ふことを告白しなければならぬ。

その腰巻は二週間に一度ぐらひは同じ場所に、窓から斜に見下さる背所に、きつと干される。私は、それが矢野さんのものであるか、りね子ちゃんのものであるか、と一人心中で思ひ惑んでゐた。矢野さんのなさるものとしては、あまり短か過ぎるし、あの細いりね子ちゃんのものとしてはあまり広すぎるし。でもそれはどうでもいい。あのはねかへるやうに肥つた矢野さんが付けられるにしても、ストローのやうなりね子ちゃん腰に付けると考へても、私は心臓が縮んでしまふやうな胸づまりを感じられたからだ。

そしてもうこうした秘やかなうれしい心の遊びを忘れることが出来なかつた。

私は階下に向つて遠慮がちにこう云つた。

「あのね。あのね。何か白い布に雪がかかつてあますよ」

「はい」

といふ返事がした。私は身顛ひしてまた深く寝台の中へ顔を埋めた。

翌る日は雪であつた、北の国では見られないことであらうが、神戸では雪明けの日はいつもより晴れ上つた天気になる。

私は洋館の南で日向ぬくもりしながら、ミリカンの娘のエミリーさんと話をしてゐた。

今日はなぜこんなに眩しいのと訊かれて雪の反射だと云つたり、海を見るとあんなに光つてゐますから海からも光線が来るかも知れませんなどと答へてゐた。

そこへりね子ちゃんが走つてきて

「兄さん。怪我した。括つて、早く、早く」

と云ひながら半分泣きさうな顔をしてせきたてたのであつた。顔のどつか一部に痙攣的にピクピク震へてゐる所があつた。私は引張られるままについて行きながら

「どこですりむいたの」

と幾度も尋ねた。

「ここよ」

と云つて窓の下の板を指した。そこには釘の頭が出てゐて、それに血がついてゐた。

「どうしてこんなものにひつかかつたの」

「でも転げそうになつたもの手で压えたんだわ」

りね子は心持蒼くなつて云ひ渡んでゐた。私はりね子の性質をよく知つてゐたから、怖いことだ

が、自分ですりむいたんだなと思つた。私はハンカチを裂いて細い高々指を括つてやつた。

「兄さんエミリーさんお好き？」

「好き」

「私は？」

「好き」

「おやエミリーさんと私とどちらがお好き」

「どちらも」

「そんなことないわ」

「でもほんとだもの。そんなこといふと嫌いになるよ」

「私には、お父さんがないから嫌ひなんでせう」

「りね子ちゃんほんとうにお父さんがないの」

「いいえ、あつたわ」

「さう、僕はないんだよ」

「わたしのお父さんはね、ヴァイオリンがうまかつたわ」

「親切だつたの」

「大きくつて強かつたから、怖^{おそ}づかなかつたわ。ピストルなんか持つてゐるんですもんね」